

第1巻

空山

風と火のチベット

アーライ
Alai
阿来

チベットの村の変遷をたどる

『空山』^{くうざん}は六つの独立した物語によって、チベット族の村の一九五〇年代から一九九〇年代までの変遷をたどる大長篇。本書はこのうち第一部の二作品を収録している。「風に散る」は五〇年代、貧困と差別の中で生きる母子家庭とこれを助ける還俗した僧侶とその息子を描く。「天の火」は森林火災を背景に、文革で迫害を受けた巫術師の生涯を描く。



【著者紹介】一九五九年、四川省の生まれ、母親がチベット族、父親が回族。トラクター運転手、小中学校の教師を経て、八四年から文学雑誌の編集者となった。かたわら、文学創作を始める。長篇『塵埃落定』（一九九八）は四川省のチベット族地区の族長一家の盛衰を描く大作で、第五回茅盾文学賞を受賞。現在は四川省作家協会の主席をつとめている。

【収録作品】「空山——風と火のチベット」（第一部）

【訳者】山口守（日本大学教授）

Take Free!

勉誠出版

Tel03-5215-9021

Fax03-5215-9025

WEBSITE. <http://bensei.jp>

「コレクション中国同時代小説」第一期（第1巻～第5巻）

2012年4月下旬刊行!

※第二期（第6巻～第10巻）は6月刊行予定

ジル村伝説・巻一「風に散る」

あの事件があつてから長い月日がたち、成長したグラは、前から俯いてやつて来たエンポが擦れ違う時に目を上げて、血走った目で睨みつけても、もう恐れることはなく、言い難い後ろめたさを感じることもなくなった。この時もそうだった。製粉小屋からジル村まで起伏して続く路上で、遠く前方から人がやつて来た。まずフェルト帽を被った頭が坂の下から現れて、上下に揺れ動き、その後、盛り上がった肩が見え、やがて遅い体全体が、悪魔が地下から出現したように正面から迫ってきた。

最初の頃、グラはいつも恐れと言ひ難い後ろめたさを感じた。だがいまはそうではない。顔を上げ、心の中で多少怯えつつも、目に憎しみの炎を燃え上がらせる。だが、その血走った大きな目と向き合ううちに、憎しみの態度はたまために取って代わり、やがて視線は頭と共に下を向いてしまった。

この老若二人の男は道で擦れ違う度に、こうして無言のまま火花を散らす。最初、若いグラは怯えた敗残者であった。いまや形勢がやや逆転し、まだ老いてもいないのに年寄りじみたエンポが、運命と諦めたようにうなだれて、若者の鋭い視線を避けるのである。

すべては一人の少年の死が原因だった。少年はグラより四歳年下だった。その少年がエンポの息子だった。九歳に

なつたエンポの息子は年の瀬が近づいたある日、爆竹でけがをした。傷口から感染して、年越しが終わるとまもなく死んでしまった。

九歳の少年が爆竹でけがをすること自体は珍しくない。その時、はしゃいだ子供たちがどつと歓声を上げて散り散りになり、青白い顔の痩せた子どもがけがをして、独り小さな広場の真ん中で泣きじゃくっていた。痛みからというより怯えて泣いていたのであった。この少年は何かにつけ怖がるので、ウサギというあだ名がついていた。ウサギは泣きながら家へ帰った。このことは本来それで終わりになるはずだった。だが漢族暦の新年からチベット暦（仏教に由来する太陽暦）の新年にかけて、ウサギの首に巻かれた白い布が日に日に汚くなり、本人も日に日に弱っていった。村の西は

その言葉通り、その日の夜、ウサギは死んだ。

ウサギが死ぬ前に、村にそれとなく噂が広まっていた。ウサギにけがを負わせた爆竹はグラの手から放たれたものだ。噂とはそういうものだ。確かではないのに、風のようにどこにでも入り込む。グラは思った。みんな思い違いをしている。僕は爆竹なんて持っていなかった。僕には父さんも、爆竹を取って来てくれる兄さんもない。垣根越しにウサギの祖母に向かつて「僕が投げた爆竹だと思っっているの」と訊いた。

婆さんは濁った眼を上げた。「おまえもあの子と同じ可哀そうな子だよ」

初めてウサギの父親に会い、その目から怒りの炎が燃え上がっているのを目にした時は、もう少しで自分がウサギの命を奪ったのだと信じそうになった。声の小さなウサギ、体の弱いウサギ。いつも静かに祖母と一緒に日向ぼっこをしていたウサギはとうとう死んでしまった。火葬場で青白い煙となって風に散り、二度と村の広場に姿を現さなくなった。その日の午後、柳の綿毛が空中に漂う中、グラは小さな小麦粉袋を背負って製粉小屋から家に帰る途中、ウサギの父親エンポに出会ったのだ。

エンポは若い頃、万象寺でラマを務めるおじのジャンツェコンボに従って出家したが、その後、一九五六年におじ

と共に政府の強制命令で還俗した。村では数少ない字の読める人間だった。彼より教養のある者はラマ僧ジャンツェコンボしかいなかった。

ジャンツェコンボは知識人気質の人物である。エンポもそのため逞しい体格とはあまり似つかわしくない善良そうな眼差しと、いつも笑みをたたえた表情をしている。

だが、いま正面からやってくるエンポは、その逞しい体が悲しみに歪み、整った顔が憎しみで崩れ、澄み切った両目は真つ赤に血走っている。その眼差しは刀のように冷たく、炭のように熱い。グラは立ち止まり、喉を整えて何か言おうとしたが、エンポの憎しみに満ちた両目に見据えられて、唇がどうしても開かなかった。腹の中で「ウサギは僕が殺したんじゃないと婆さんだつて言っていた」とつぶやく声が聞こえたが、腹の中の声は当然自分にしか聞こえない。エンポは歩み去った。その日の夜、羊皮の寝具に横たわったグラは、何度も何度も胸の痛みを覚えた。そのうち夢の中に、青白い顔のウサギがはにかんだ笑みを浮かべて現れた。ウサギはか細い声で「みんなグラ兄ちゃんに濡れ衣を着せている。爆竹は兄ちゃんが投げたんじゃないの」と言った。

グラはぱつと起き上がった。「それならいったい誰なんだ。コルチ家のアカとワンチェ兄弟か、大声のロウトンチュの息子、兎口のチメか、それとも……」

本当に奇妙な夢だった。グラが名前を挙げるたびにウサギが背後から顔を出し、その後、凶暴そうな顔がウサギを取り巻き、一斉に「言え、誰なんだ！」と叫ぶのである。

ウサギの顔はどんどん白くなり、薄くなり、一枚の紙のようになって飛んで行ってしまった。グラは母親を呼んだが、母親は部屋の中になかった。きつとまた脱穀場へ行つたのだろう。いい匂いのする干し草の山は、男女が愛を交わすのに絶好の場所なのだ。グラの目からはらはらと涙がこぼれた。

自分が私生児だから除け者にされ、こんな途方もない濡れ衣を着せられるのか、それはグラには分からない。だがまさにそのために、還俗した二人の村の僧侶の目にいつも宿る温和な輝きや、顔に浮かぶ穏やかな笑みに親しみと温

もりを感じる。ジャンツェコンボは五十歳を過ぎて還俗し、村へ帰っても独身を通した。彼が「腰帯の緩い女」である母サンタンと二人きりで出会った時、気まずそうな表情をするのを見るのがグラは好きだった。僧侶にとつて、この手の女は邪悪に満ちた魔女なのだ。だがこの魔女は彼を誘惑することも犯すこともしない。この女はただ絶えず蠱惑的な薄笑いを浮かべ、しかもその笑みには特定の対象はないのだ。同様に、好んで何やら口の中でつぶやいているが、このつぶやきには特定の対象はない。

グラは以前、還俗した僧侶エンポが自分の父親ではないかと想像したことがある。しかしエンポは美しいロルチンツォを娶った。生まれたのが虚弱なウサギだった。ウサギの命はひとつの爆竹で失われた。この爆竹がグラの手から放たれたものだと言々を噂を広げた。

グラは母親を呼んだが、母親は出かけていなかった。匂いのいい干し草の山のある脱穀場へ行つたのだ。月の光が室内に差し込み、彼は手を窓の下へ伸ばした。この手はいままで一度たりと、大きな赤い紙に包まれた爆竹に、その身の丈に釣り合わせる大音響を発する爆竹に触れたことはなかった。だがいまは、朦朧たる月光の下、ひとつの爆竹が、ひとつの事件が、本当に彼の指先から弾け出て、突然血が滴り落ちるのが見え、ある種の鋭い痛みが肺腑を引き裂くようにはつきりと感じられた。

二

ロルチンツォは美しいが、村の多くの男たちは彼女と結婚したがらなかつた。細い腰と白い肌の美しさはジル村でいま評価される健康美ではない。老人たちは残念そうであった。革命前であれば、そうしたか弱く蠱惑的な美しさは、生産活動に従事しない土司トッス（漢族王朝に封じられた少数民族の長）に早くから目を付けられ、馬に跨って訪問される対象となつただろう。だが人民全員がみな耕地に赴いても腹いっぱい食べられないかもしれない時代にあつて、そうした美しさを鑑賞できる

者がどこにいるだろう。

「これ以上摘んでもらえないなら、この花は枯れてしまう」エンポの母親はそのため息をついた。彼女自身かつて濃い眉と大きな目をした美人だった。還俗した彼女の息子は男らしい体格外に、母親から濃い眉と大きな目を受け継ぎ、きりりとした顔立ちと力強さがひととき目立った。

その年の春、エンポの母親はいま一度、同情に満ち溢れた態度でロルチンツォの手を引つ張つて言った。「これ以上誰かが摘みに来てくれなければ、花は空しく枯れてしまうのよ」

その時、ロルチンツォの柳腰はもう水桶くらい太くなっていたが、老婆は白内障を患つていてよく見えないのであった。ジル村では女は五十を超えると、ごく少数の者だけがいつそう眼力が鋭くなり、大多数の者は心優しく大人しくなつて、そのうち何も分からなくなるのである。ロルチンツォはか弱い体つきのため神経も繊細で、エンポの母親が老いた手で彼女の手の甲を撫で、粗野なしわがれ声で喋つたものだから、少し怖くなり、手を離して逃げ出ししまった。

老婆はじつと耳を傾けて、スカートの裾が擦れる音を聞き、さらに風が麦畑を揺らすのを聞き、そして春のどこか奥深いところでホトトギスが鳴く声を風が運んでくるのを聞いた。「恥ずかしがり屋だね」と彼女は笑つた。

母親は知らなかったが、ロルチンツォは走つて行つて、まっすぐその息子の胸に飛び込み、ねじつたりつねつたり、泣いたり笑つたりした。「エンポ、お母さんがあんなに可愛がつてくれるのよ。早くわたしを嫁にもらつてちょうだい」

エンポは心配事を抱えておじのところへ行つた。「師匠様、おれを殴つてください」。ジャンツェコンボは言った。「おまえを殴りたくないわけじゃないが、殴つたらおまえの体についている虱を殺すことになる。なあ甥っ子よ。おまえが戒律を犯したからと言って、わしまで巻き添えにしないでくれ。それは弟子たるものの道ではないぞ」

ジャンツェコンボはそう言うと、手を後ろに組んで、風に揺れる麦畑を突つ切つて村の方へ向かつた。昔、ジル村

一番の美人だった彼の妹は、泉のそばのコノテガシワの古木の下に座って、かすんだ目でこちらを眺めていた。いまどきの世事など、目の良い者がいくらまなこを凝らしても、或いは学のある者でもはつきり見えるわけではない。おまえは何を見ようとしているのか。心の中でそうため息をつきながら、ジャンツェコンボは自分の妹に近づいた。「めでたい事だ、妹よ。孫が抱けるぞ」

「でもエンポは出家した身だから、仏様の罰が下るんじゃないかね」

ジャンツェコンボは幽遠な青空を眺めながら小声で言った。「安心するがいい。仏様は、いまでは他の場所へ行かれてしまった」

母親は大した考えもなく仏様のことを口にしただけだったが、いったん自分の息子が本当にロルチンツォと男女の仲になったと分かると、泣いて気を失ってしまった。その時、母親にそのことを報告しようと思つたエンポが、麦畑の真ん中の小道を歩いてやつて来た。ちょうど穂を出している麦が両側からしなだれかかって、小道全体がほとんど埋もれてしまつていた。遅しい体のエンポがせわしなくその中を突つ切つて来ると、花粉を発散している麦の穂から、次々に花粉があたり一面に飛び散り、陽光を受けてキラキラと細かな光を放つた。ジャンツェコンボの目には、若麦の深部に溜まつた露までも、野獣のように遅しい坊主頭の男がぶつかるたびに飛散する光景が見えた。何と美しい光景だろう。感動の余り気を失いそうだった。寺で修行している時に悟りを得るのも、こうした悦楽と同じだ。彼は泉に腹ばいになると、甘く清冽な水を口を含み、妹の顔に吹きかけた。彼女は身震いして意識を取り戻すと、泉の上に覆いかぶさるコノテガシワの巨木のでっぺんをしばらく茫然と眺め、やがて口を開けて泣きそうになった。ジャンツェコンボは妹を助け起こした。「ほら、見てごらん」

そこでエンポの母親も目にした。息子が息せき切つて大股で麦畑を突つ切り、揺れ動く足や大きな両手が花粉を含んだ麦の穂にぶつかると、花粉が四方に飛散して、それを目当てに集まつてきた多くの蝶が驚いて舞い上がり、高く低く風の中を漂っている。この情景に心から突き動かされた彼女の目には、整つた顔立ちで、輝く眼差しを持ったこ

の男が、あたかも地上に降臨した天の神のごとく見えた。息子が目の前に来たとなん、彼女はまた泣き出した。「おまえ、あの可哀そうな娘を嫁に迎えておくれ」

その時、遠くからガンガンと銅鑼の音が響いてきた。人民公社と収穫を奪い合っている猿や鳥の群れを、誰かが畑のそばで追い立てているのだ。それは一九五八年夏のことだった。その頃、わずか四歳余りのグラはツアンパ（裸麦を炒って粉にし、
たチベットの主食）をいくらか入れた袋をずるずる引きずってやって来た。村で一番温和な三人が泉のほとりのコノテガシワの古木の木陰に座っているのが目に入った。先ほど行ってきた製粉小屋では、白を回すどの家の人も必ずいくらかのツアンパをグラに恵んでくれた。母親のサンタンがちゃんと働かないので、生産隊から配給される食糧が少なく、夏の終わり近く、まだ秋にならない頃には食糧が尽きていた。

ジャンツエコンボが手招きすると、グラは鼻水をすすって三人の前へやって来た。

エンポの母親は腕を伸ばして袋に触った。「おまえは今日運が良かったみたいだね」

グラが笑うと、エンポが「ほら、笑うと母親をつくりだ」と言った。

確かに、グラの笑顔は思慮分別や恥じらいがなく、だらしのない母親に似ていた。

エンポの母親エシジャンは愛おしむようにグラの頭を撫でながら「可哀そうな子だね。何の罪もないのに」と言つて、懐の奥から麻の実をまぶした焙烙パンを取り出すと、小さなかけらに割ってグラの手に渡した。「可哀そうな子だね。うちの孫が生まれたら、おまえと遊ばせよう。もうすぐ友だちができるよ」

グラはパンをひと口かじると笑いながら駆け出した。家の入口まで走ってくると、サンタンが框に寄りかかり、歯並びの良い白い歯を見せながら、思慮分別なく、恥じらいもなく、輝く笑みを浮かべていた。

その年の初雪の日にウサギが生まれた。この知らせは雪のようにすがすがしく清らかだった。降りしきる雪は、村の東にある泉の上に覆いかぶさるコノテガシワの古木に舞い落ち、そこから更に東に延びる、製粉小屋に続く起伏した路上に舞い落ち、各家の庭のすつかり葉が落ちて枝ぶりのたくましい胡桃の木に舞い落ち、こけら葺きかもしくは

泥で塗ら固めた屋根に舞い落ち、村の至る所に舞い落ちた。グラは空一面に舞い漂う雪を眺めながら、心の中でエシジャン婆さんの声がこだましていた。「おまえに友だちができる。友だちができる」。

グラはげらげら笑い出した。

母親は「まあこの子つたら、何がおかしいの？」と訊いた。

グラは答えずにげらげら笑い続け、サンタンもつられてげらげら笑った。この雪は降るのも止むのも早かった。太陽が雲の隙間から顔を見せ、日の光がうつすらと大地へ差し込んだ。人々が外へ出てくると、足跡がどんどん増えて、縦横に行き来するものだから、純白の雪の地面が汚らしいぬかるみに変わってしまった。その時、人々が伝えた噂が、グラの気持ちも泥のついた雪のように汚らしく気の重いものに変えてしまった。ロルチンツォが生んだばかりの息子は泣き声もか細く、乳を吸う力さえ十分でないから、たぶん生きられないだろうと、人々はそれとなく噂し合った。冬の間ずっと、雪が降る度にこの話が同じように言い伝えられた。エンポの澄んだ目がかすかに充血していることにグラも気がつき、勇気を奮ってその男の前に行ったものの、何も言葉が出なかった。エンポは自分の問題に気を取られていて、グラにぼんやり一瞥くれただけで歩み去った。

ジル村の家屋はみな石造りの二階建てか三階建てで、三階建ての家なら上二階が人間の住居で一階が家畜小屋、二階建ての家なら家畜小屋は家の外の樹木で囲われた中庭に建てられていた。牛や羊は生産隊（一九五八年に始まる人民公社制度で最下部の集団経済組織）の所有なので、個人の家畜小屋には私有の乳牛が数頭許されるだけであつた。

エンポの家はそうした石造りの二階建てだつた。家畜小屋が中庭の大半を占めていた。庭の残りの半分は二本のリングゴの木と一本のワリングゴだ。木の下にはウイキョウとニンニクがひと畝ずつある。冬になると果樹の葉がすっかり落ちて、木の下の地面が凍結して白っぽくなる。だが家畜小屋には干し草が敷き詰められ、その上に日光が当たると暖かく柔らかくなり、日が更に高くなると、乳牛の残した生臭さが蒸気となって立ち昇り、家畜小屋にいつその温もりが加わる。そういう時には、暇な人は庭の家畜小屋の干し草のところへ行つて座り、日光の輝きに満ちた温も

りの中で手仕事をする。労働が集団化されてから、人々の暇な時間がどんどん減って、家畜小屋に腰を下ろして日光を享受できるのは一部の老人だけとなった。グラの家は生産隊の倉庫に沿って建てられた掘立小屋で中庭がなく、自家用の家畜の囲いもなかった。サンタンははじめに畑に行つて働こうとせず、どこかの家で人のいない家畜小屋があればそこに入り浸つて、腰を下ろして長く艶やかな黒髪を梳かすのが常だった。一番よく行くのがエンポの家の中庭だった。というのも、エンポの家の中庭なら日光がよく当たるからだが、加えて昼飯時になつても彼女が自分の家へ帰らないと、その家の者が食べ物を持つてきてくれるからでもあった。グラもあちこちの家で食べさせてもらった。時には昼時になつても食べるものがないと、サンタンと一緒にエンポの家へ行つてご馳走になる。エンポの母親のエシジャンは木の盆を持つて出てくる。緑茶二杯、薄焼きパン一枚、焼いたじゃがいも二、三個と、盛り沢山ではないし量もそう多くないが、太陽が山に落ちて、二人が家に戻つて夕飯を食べるまでは十分もつ。

しかし、その年、エンポの家に新しい女主人がやつて来た。この女主人は招かれざる客に対してその美しい顔にいつも嫌悪の表情を浮かべるので、サンタンは二度とエンポの家の中庭に行かなくなった。ある日、グラがエンポの家の前を通りかかると、垣根越しにエシジャンが「おまえと母さんはなんとかやつているのかい」と尋ねた。

グラは答えなかった。ジル村がグラ親子に特に良くしてくれるはずがなく、グラ自身として良い悪いに何の感情もわかなかつた。人々はいつともいまの暮らしがいいか悪いか議論していた。一部の者は昔の方がよかつたと言ひ、一部の者はいまの暮らしは昔より遥かにいいと言つた。良い派と悪い派はそれぞれ派閥を形成し、良い派は上の方の支持を受けて一貫して優勢であつた。グラはそれに何も感じなかつた。エシジャンは垣根越しに「ちよつとお待ち」と言つてから、少しよろけながら母屋に戻り、煮凝りのついた牛肉の塊をグラに渡した。彼女の表情や動作には老人の緩慢さが見られた。

いつもならグラはとつづくに牛肉にかぶりついてるところだが、この時はぼんやりとエシジャンを見つめた。エシジャンはいつの間にか門歯が抜け落ちた口を開けて笑つた。「年寄りになつたと思つてゐるんだね」。

グラはようやく牛肉をひと齧りした。

「孫ができたんだから、婆さまとなれば老けるのも無理ないのさ」 エシジャンは半分あきらめたように、また半分満足したように笑った。

グラはその時大きな塊を飲み込んだので、喉がつかえてしまった。だが両目を丸くし、青筋の目立つ首を伸ばして力を入れ、喉の奥につかえた牛肉を丸ごと飲み込んだ。一夜のうちにエシジャンは壮健な女性から老婆へと変わった。これはジル村ではどこでも見られることだ。壮年の男女が何かのきっかけで突然老人や老婆に変わってしまうのだ。老人は鼻につんとくるキセルをふかしながら、何度も摒際に痰を吐く。健康そのものの女性のぴんと伸びた腰や背が瞬間に曲がり、鋭く輝く目もくすんで濁っていく。一代また一代とジル村の人々はこうして老いていくようだ。ただ、エシジャンを目の前にした少年は、こうしたいささか驚きを感じざるを得ない事実に初めて気がついた。だがその注意力はあつという間に手の中の大きな肉の塊に移った。牛肉はひと晩じゅう煮込んだもので、表面に煮凝りがたくさんついている。これは煮汁が固まったものだ。グラは家へ戻る道すがら、この煮凝りを啜った。煮凝りは口の中で溶け、幸せを感じさせる濃厚な牛肉と香料の味がした。

この煮凝りがあつたおかげで、グラが途中で牛肉を平らげることがなく、母親も幸せにありついていた。

三

この大きな牛肉が残した幸せな記憶は、グラに毎日何回もその木の垣根で囲われた庭へ足を向けさせるに十分だった。待ち続けたある日、エシジャンが庭に現れた。

彼女は黄金色の干した麦わらの上に泰然と腰を下ろし、胸に例の赤ん坊を抱いていた。婆さんは体を揺らして自分を揺れ続ける揺り籠代わりとし、その揺り籠の中に幸せいっぱい赤ん坊がいた。婆さんは顔を上げて、視線をつい

に赤ん坊の体から離してグラに向けた。グラはご機嫌を伺うような笑みを見せたが、婆さんは再び視線を戻して赤ん坊を見た。懐から小さなバターの塊を取り出すと、指で揉んで口の中に入れて溶かし、赤ん坊の額に少しずつ塗った。塗りながら口から「おうおう、ちゅっちゅつ、あ、ああ」と音ははつきりしないが、慈しみに満ちた声を発した。

グラは垣根の扉を開けて庭に入り、エシジャンのところまでやって来た。婆さんはまだ口の中でつぶやき続けている。グラの視線が彼女が何気なく体のそばに置いたそのバターの塊に落ちた。バターは日光に当たって溶けて干し草にいくらか染み込み、油のにじんだ干し草から特別な芳しさが立ち上っていた。グラは素早く手を出し、婆さんが再びバターをつまもうとする頃には、すでに舌を使ってそのかけらを口の中で何度も舐り回し、首を長く伸ばしてごくりと胃の中に飲み込んでいた。

婆さんはバターをつまもうとした時、ただ手を伸ばしただけで、依然として視線は額が油ででかてか光り、目玉をぐるぐる動かしている赤ん坊に向けたままだった。

婆さんは独り言をつぶやいた。「おかしいねえ。バターがなくなっちゃ」

その時、グラはもう身をかがめて垣根の外へ逃れ出ていた。

グラは口いっぱい含んだバターを垂らしながら、げらげら笑った。婆さんは耳が遠いので、その子どもの笑い声が聞こえない。だが、木の上にとまっていたカラスは驚いて、ばさばさと羽ばたきして飛び去った。婆さんは赤ん坊に向かって「おや、バターがカラスに盗まれてしまったよ」と言った。

グラが再び庭に入ると、婆さんはグラに対して「カラスがバターを盗んでいったよ」と言った。

婆さんは更に「さあ、うちの小さなウサギを見ておくれ」と言った。

グラは手を伸ばしたが、指がそのバターを一面に塗った額に触れたとたん、火傷したかのようにさつと引つ込めた。こんなにも滑らかできめ細かいものをいままで触ったことがなかった。生活はざらざらしたものだが、その一部にはこんなにも不思議なほどきめ細やかなものが存在する。そのため、ざらざらしたものには慣れた三歳の子どもの指

が、その経験したことのない感触によって驚きの反応を示したのだ。

婆さんは笑ってグラの指を一本引き寄せると、赤ん坊の手の中に押し込んだ。赤ん坊は滑らかできめ細やかな手でその指をしつかりと握りしめた。赤ん坊の手にもしつかりした握力があり、また温もりがあることをグラは知らなかった。こういう柔らかくてすべすべした温かい感触には慣れなかった。ぐつと力を入れて自分の指を引き抜いた。赤ん坊は泣きだした。赤ん坊の泣き声は子猫が悲しそうに泣くの似ていた。

「早く手を戻しておやり。うちのウサギは本当におまえが好きなんだねえ」

グラは野育ちの子どものもので、こうして人から好かれるのに耐え切れず、さつと駆け出した。

この年の冬、そのあと続く春も夏も秋も、グラは二度とその庭に入ることがなかった。次にその庭へ入ったのは、翌年の冬も終わろうとする頃だった。ひと冬過ぎて、グラは一歳成長した。いつもと同じようにエンポの家を通り過ぎる時、グラは思わず足取りを速めた。よかったと自分に言った。婆さんは庭にいないし、よちよち歩きを始めたばかりのウサギも庭にいない。ほつとして足取りを緩めたとたん、何やら柔らかいものに足がぶつかった。火傷したかのように足をさつと引つ込めた。ウサギが地面に座って、口を開けて無心の笑みを浮かべている。足を上げて逃げ出そうと思ったら、婆さんが地面から湧き出たように庭に登場し、顔一面に警戒心を露わにした。「このいたずらっ子め。うちのウサギを連れ回さないでおくれ」。

この時はグラがウサギをまねて、口を大きく開けてばか笑いをする番だった。ようやく歩くことを覚えたばかりの子どもが、どうしてグラのような野育ちの子と一緒にあちこち駆け回ることができるのか。村のどの家の大人が自分の子どもを私生児ごときとあちこち駆け回るのを許すというのか。

婆さんはすぐに慈愛に満ちた笑顔に変わった。「よしよし。ぼうつとしてないで、うちの子を連れてきておくれ」

ウサギが先に小さな手を伸ばし、グラはためらいながら握りしめた。その手は相変わらず柔らかかったが、最初に触れた時のような柔らかさはなくなり、もつと重要なことに、手には以前のような温もりがなく、ひんやり冷た

かった。グラは自分の喉から、その小さな手よりもっと柔らかな声が発せられるのを聞いた。「おいで。さあ、ウサギちゃん」

この日、エンポの家の庭で婆さんはグラにチーズをくれた。

春があつという間にやってきて、またあつという間に過ぎ去つた。夏になる頃には、グラはウサギが本当に自分の弟のような気がしてきた。ウサギはどんどん成長した。グラと一緒に村じゅうを走り回るようになった。初めてグラがウサギを連れて庭を出ようとする時、婆さんは「グラ！ どうしてウサギをそんな遠いところへ連れて行くの」と驚きの声を上げた。

グラはすぐにウサギを連れて庭へ戻つた。

ところが、婆さんは表情を変えていぶかしげな様子を見せ、手を振つた。「行つておいで。行つておいで」

庭を出て村内に入った。くねくねと曲がつた路地を通り抜け、二、三軒の家の垣根を通り過ぎると、天地がぱつと開け、村の広場へ出た。グラの家は、生産隊の倉庫の厚い壁に建てかけられた粗末な二間の小屋で、入り口は広場に面し、他の家のように二階や庭や、白樺の薪を立てて柳の枝でしっかり縛つた垣根もなかった。昼近く、村内は静まり返り、牛や羊は山へ上り、大人たちは畑へ出て、サンタンだけが何もせずに入り口に寄りかかつて、物憂げに、また人惑わしげに太陽を浴びて座っていた。グラがウサギの手を引いているのを見ると、サンタンの目が一瞬きらつと光つたが、それでもただ物憂げに手招きしただけだった。グラはウサギを自分の母親の前へ連れてきた。サンタンはウサギに口づけすると同時に、満足したように鼻を鳴らした。彼女は「まあ、見せてちょうだい。こんなに小さいのね。口づけさせて、おちびちゃん」と言った。

それが終わるとサンタンの顔にまた気だるそうな表情が浮かんで、手を振つた。「グラ、この子を連れて行つて」
グラは母親に尋ねた。「母ちゃん、大人はみんな畑へ行っているのに、どうして働かないの」

サンタンはじつと息子を見つめ、それが自分には答えられない究極の深奥な問題であるかのように、目に次第に当

惑の表情が浮かんできた。この時、グラは初めて自分の母親にそうした問題を問ひ質した。この問題はとても長い問心に秘めていたのが、とうとう口をついて出たのだ。グラには分かっていた。もし母親が畑へ出て働けば、村人は親子二人にもっと優しくしてくれるだろう。もし母親が村人と同じように畑へ出て働けば、生産隊からもっとたくさん食糧の配給を受けられ、牛肉や羊肉やバターだって配給されるだろう。配給は倉庫の入り口で行われる。すなわち垣根で隔てられていないこの親子の家の前で行われる。生産隊が二人に食糧をいくらか配給するのは、すべて村人全員の憐みから出たことで、肉の配給を受け、油の配給を受けるのは、親子二人にとって考えてはいけない過分の望みを抱くことなのだ。

数日後、グラはウサギを連れてもっと遠くまで出かけ、村の裏の山腹で、森林の草地に腹ばいになって、早熟の野イチゴを食べた。腹いっぱい食べると、グラはこう訊いた。「ウサギ、グラ兄ちゃんといると楽しいか」

ウサギは目を大きくし、細長い首を伸ばすところくり頷いた。

ウサギは生まれつき痩せて弱々しかった。ジル村の子どもの大多数は元気で丈夫だ。たとえ生まれつき痩せて弱々しかったとしても、たくさん食べればあつという間に頑健になる。ところが、ウサギは違った。少し余計に食べると下痢してしまう。ウサギはいつも病弱で、一日中元気がない。話す声も特別恥ずかしがり屋の女の子みたいにか細い。

グラは続けた。「それなら毎日遊びに連れてきてやるよ」

ウサギはそれを聞いてかろうじてか細い声で言った。「グラ兄ちゃんに毎日遊びに連れてきてほしい」

ウサギが少し疲れると、二人は草地に寝転んでしばらく休む。二人の子どもが寝転がると、体より高く伸びた草の茎が、頭上で風に揺れる。風の上方は高い空だ。洗ってからちぎってふわふわにした羊毛のような雲の塊が、時折ゆつくりと移動していく。揺れ動く草の茎ではたかさんの虫が上下に忙しく動き回っている。蟻は慌ただしく茎のてっぺんまで上ると、それ以上道がないので、触手を虚空に向けてしばし空しく動かしした後、身を返して茎伝いに地面へ戻る。きれいな殻を背負ったてんとう虫が高いところまで這い上がり、身をぶるつと震わせると、色とりどりの殻が軽やかな翅

に変身する。一本の草から別の草へ渡り、ひと叢の花から別の花へと飛び移る。草の茎の下には太ったバッタがいる。草の茎の上にはしなやかで美しい体つきのトンボが止まっている。

グラはウサギに言った。「目をつぶってごらん。目をつぶるとゆっくり休めるよ」

「休みたいけど、目をつぶりたくない」ウサギの薄っぺらな額の皮膚に皺がより、顔に大人じみた心配と憂いの表情が浮かんだ。「でも疲れた。心臓が疲れちゃったんだ。大人はみんな僕の命が長くないと言っている」。ウサギが死んだ後、グラはいつもこの日のウサギの大人のような表情を思い出す。わずか三歳の、女のようにか細い声の子どもにすぎなかったのに。その日からウサギの成長が形になった。大人と同じように疲れやすい心臓と、細長い首と、魚のような飛び出た目をした子どもになった。

深い同情心が心の奥深くからわき起こり、その感覚が上へ上へと昇って、額まで突き当たると、折り返して下に向いた。そのためグラは目が潤み、鼻の奥がつんとなった。グラは手を広げると片方ずつウサギの目を覆った。「いい子だから、休め。こうすれば目をつぶるのと同じさ」。その後、グラの口ぶりは命令調から懇願へと変わった。「仲良くしような。僕には友だちがいらないし、おまえにも友だちがいらない」

ウサギはか細い声で「うん、僕たちは友だちだ」と言った。

グラは自分でも感動してしまい、誇らしげな面持ちでウサギを連れて村へ入ると、すぐに家の入り口に寄りかかっていた母親に向かって叫んだ。「母ちゃん、僕はウサギちゃんと友だちになった!」

サンタンはウサギを抱きしめて猛烈な口づけを浴びせると「まあ、すばらしい。うちのグラに友だちができた。弟ができた」

ウサギの目に驚いた表情が見え、懸命に小さな足をばたつかせて、その女の腕から逃げようとした。でも逃げ出せるはずがない。そこで、口を開けると大声で泣き出した。黒ずんだ血管がいつもこめかみに脈打っているこの子は、話す時の声はか細いのに、泣き声ときたらワーワーと大声のカラスみたいだ。サンタンが手を放すと、ウサギはその

懐から滑り落ちたが、さすがにグラは動作が素早く、先に手を出してウサギを支えたので、地面で転ぶことにはならなかった。ウサギのこめかみの血管はいっそう激しく脈打ち、薄く透明な皮膚を突き破らんとするかに見えたので、グラは恐れをなして、言葉も悲しい響きを帯びた。「頼むから泣かないで、泣かないで。僕たちを苦しめたくなかつたら、泣かないでくれ」。ウサギはゆっくりと泣くのをやめたが、しゃくりあげる時は息を吐き終わっても次の息が吸い込めないかのような様子だった。青い血管はいっそう膨れ上がって、青ざめた皮膚の下でとぐろを巻き、何か気持の悪い虫のようだ。ウサギがつらそうにしゃくりあげる度にその虫がうごめき、その薄ぺらな皮膚を突き破って出てきそうだった。グラはこの時は本当に心配になった。もしその虫が皮膚を突き破ってしまったら、すべてが終わりだ。グラは足の力を失って地面に跪き、両手で子どもの顔を持って懇願しながら、その虫に口づけし続けた。それなのに、その時グラの愛する母親はばか笑いするばかりだった。

ついにウサギが落ち着きを取り戻すと、サンタンは家の中から子どもの口に詰め込めそうなものを何でも探し出して、ウサギの口にぎゅうぎゅうに詰め込んだ。サンタンは大声を上げて笑い、ウサギもつられてげらげらと笑った。だがグラは全身の力が抜けるのを感じるばかりで、壁に寄りかかって身じろぎもしなかった。この脆弱な子どもがひたすら怖く感じられた。二度とウサギの感情を爆発させまいと思った。

大人は畑の仕事を終えて戻ってきたが、ウサギは家に帰ってきていない。エシジャン婆さんは壁際にもたれて眠っていた。エンポが揺り動かすと、婆さんの顔には驚き慌てふためいた様子が見えた。「子どもは？ 子どもはどこ？」その後、ウサギの父親のエンポと母親のロルチンツォ、それに大おじのジャンツェコンボは庭を飛び出し、慌てふためいて広場に姿を現した。ロルチンツォがウサギを呼ぶ声を聞くと、まるで子どもが死んで家族が魂を呼び戻そうとしているかのような様子だった。この子ども探しの隊列にすぐにウサギのいとこの男女も加わった。サンタンはウサギを抱いて家の中から出てくると、正面から駆けてくる一家の人々に向かって、楽しそうに笑って言った。「今後大人が畑に出る時は、この子をうちに置いていくといいわ。おちびちゃん本当に面白いのよ」

答えもなく、子どもは素早く取り戻された。

その後、大家族はこの虚弱な子どもを取り囲みながら去って行った。黄昏が訪れて、村の上空には炊事の煙が低く四方にたなびいている。サンタンはたった一人広場に立ちくしていた。そよ風が吹くと、細かな土埃が広場のこちら側からあちら側へ、あちら側からこちら側へと吹き寄せられた。

空の夕霞はとりわけ輝きを放っていた。

家の中へ戻ったサンタンの顔には、物足りなそうな笑みが浮かんでいた。サンタンは嬉しそうに呼びかけた。「グラ、明日の朝、ウサギをうちに連れてきてよ」

グラは黙っていた。

サンタンは焼いた焙烙パンを取り出し、碗に茶を注いだ。「いい子だから、ご飯を食べなさい」

「母ちゃん、放っておいてくれ。食べたくない」

サンタンは独りで食べ始め、ふだんよりずっとおいしく食べられた。その間ずっと彼女は、あの子は面白い、面白いと喋り続けていた。グラは間の抜けた母親を嫌ってはいけなくと自分に言い聞かせた。だが、このように思慮分別がなく、他の人の表情から不測のを見抜けない母親では、自分が生んだ一人っ子から嫌われてしまうのは確かだ。しかし、この世に生まれたその日から、自分はこの村の者全員から見下される女性と助け合って生きていく運命にあることをグラは承知している。だから、我慢できなくなった時に、「母ちゃん、ちゃんと飯を食えよ。よその家の話はもうやめろ」と言うだけだった。

サンタンは頬を膨らませてパンの大きな塊を噛みながら、息子の言葉を耳にすると、噛む速度を速め、そして、美しくまたぼんやりとした両目を丸くして、首を伸ばしてパンを飲み込んだ。口を開いて話をしようと思ったが、音を立ててげつぷをもらした。熱く酸っぱい息がグラの顔に正面から吹きかかり、吐きそうになった。グラは貧しく汚い環境に生きているが、生まれつき様々な匂いに敏感だった。この敏感さゆえに、サンタンの体の匂いや、ジル村の多

くの匂いに耐えられず、そうした匂いを嗅ぐとしゃつちゅう吐き気を覚え、密かにゲーゲー戻したりした。

ウサギの婆さんはグラが訳もなく吐くのを目撃したことがあり、ため息をつきながら、こういう子は短命に決まったものだと人に話した。婆さんが言うには、こういう子はよその土地なら特異な天性を持つと言えるが、「でも、このジル村はいつた何だというのさ。泥沼だよ。泥沼でまつすぐな大木が育つかい？ 育つもんか。小さな木だって泥沼の中では腐ってしまう。分かるかい。それがいまのジル村だよ」だが婆さんの言葉を継ぐ者はいない。この言葉を継ぐ勇気のある者などいない。

婆さんの話は臨時指導部のものとは異なる。新聞の話とも、ラジオの話とも異なる。婆さんの話はずっと経歴や権威がある人間のため息を引き起こす。「こういう愚かな老婆の口から出た格言めいた言葉は縁起が悪い」。

グラ親子がジル村の表社会で飛び交う様々な話を耳にすることはあり得ない。二人はただ生きているだけで、グラはいつも訳も分からず吐き気を覚えるだけだ。グラはいつもサンタンに対する不孝の念を抑え、少なくとも家では母親らしく振る舞えるようにしていた。

いま、サンタンはグラの顔に向かって一回また一回とげつぷを繰り返して、その都度湿つて熱く、酸っぱく腐つたような息を顔に吹きかけ、そのためグラは胃がむかむかした。幸いなことに、とうとうげつぷが止まった。パンがとうとう胃の底に落ちて、サンタンは話を始めた。顔は天真爛漫そのものだった。「でも、あの子は本当に面白い」

グラは言葉もなく、ただ仕方なくこう叫んだ。「母ちゃん、僕は話したくない。気分悪い。吐きそうだし」
この思慮のない女はちらつと上目づかいした。「それなら吐けばいい。吐けばすつきりする」

グラは外へ駆け出ると、腰をかがめて、大きな声を上げて何度か吐こうとしたが、酸っぱい水がこみ上げてきても、半分まで来たところでまた胃の中に戻ってしまった。それは体の奥深くに戻ると、引き続きその中で逆巻き、何かに噛みついていく。グラは涙がこみ上げてきたが、涙がこぼれないように天を仰いだ。涙で霞んだ空の星は縁取りがはつきりしないが、瑞々しく明るく映った。

グラは力なく柵に寄りかかつて、見渡す限りの星の輝きが動いていくのを眺めていた。母親は依然として背後の炉辺で口に食べ物を押し込んでいた。この女は飢餓の時代に生まれるべき定めの特異な人間で、食べ物がある時は飽くことを知らずにつつと食べ続け、食べ物がない時は二、三日一粒も口に入れなくても、人は食べなければならぬことすら思い起こさない。母親が咀嚼する音が響く中、グラは自分が心の中でこうつぶやいているのが聞こえた。「つらくて、もう死にそうだ」

グラがこうして心の中でつぶやき、しかもそのつぶやきがいささか快感になる頃には、村全体が星の光の下でひっそりと静まり返り、石造りの家屋が夜色の中に黒々と聳え立っていた。

グラには分かっていた。自分のこの言ひのない悲しみはジル村では答えが得られない。いまや、自分がこの村を呪っているように思えた。自分の母親が恨めしかった。遙か遠くの、どことも知らぬ所からここへ流れ着いて、突然村人の前に現れ、グラを産み落とすと、こんな冷淡な村で生活を始めたのだ。母親にどこから来たのか聞いてみたかった。そこではうらかな春に花が咲くように、人々の表情が穏やかで生き生きとしていて、まさにそこが彼の知らぬ故郷なのだ。夏の夜、ほかほかと暖かい羊の皮の寝具の下に横たわっていると、まるで瀕死の老人のように、自分にはジル村というこの異郷で死ぬのだろうと思った。

グラは眠りについた。眠りに落ちてから、この我慢強い子どもの両目の端からようやく涙が溢れ出て、枕の上に落ちた。その後、グラは本当にうらかな春に花が咲く夢を見た。夢の中には一面見渡す限りの花で、黄色いのはサクラソウ、青いのはリンドウとイチハツ、赤いのは点地梅（サクランソウ科の植物。漢方の薬材）。一面の花の海へと駆けていく。なぜなら花の海の中央には高貴なお姫様のように、艶やかな裾を翻して、湖水のように幽遠な眼差しをした母親サンタンが立っている。だが目の前一面に強い光が煌くと、サンタンが甲高い叫び声を上げて、グラは目を覚ました。両足をばたつかせながら、誰かに胸倉を掴まれて中空に持ち上げられ、懐中電灯の強い光によって真っ直ぐ両目を照らされた。

強い光の背後で、歯ぎしりする音がした。「くそガキ、ろくでもないことしやがって。ろくでもないことを」

くそガキ、

くそガキ、

くそガキ、

くそガキ！

くそガキ！

グラは意識がはつきりしてきた。それがウサギの父親エンポ、あの還俗した僧侶の声だと分かった。

グラは仰天した。「僕はくそガキじゃない。いや、そうです。くそガキです。おじさん、放してください！」
だがその声は急に一段と高くなった。「殺してやる！」

グラの鼓膜は吼えるようなその声でがんがんと響いたが、「やめて！」というもつとヒステリックな叫び声が聞こえた。サンタンが狂った雌ライオンのように飛びかかり、グラを吊り上げていた男とグラもろとも床にドンと倒れた。

懐中電灯が一方に転がり、何人もの人間の足を照らした。その後、母親は泣き叫びながらグラの頭を自分の胸に抱きかかえ、グラは母親の柔らかな乳房を感じた。「わたしの息子、グラ。母ちゃんだよ。ああ、愛しい息子」

グラは母親の胸にもたれたまま「母ちゃん、僕は、僕はここにいますよ」と言った。

もうひとつの懐中電灯がつけられ、床に転がっていたこの親子と、怒りではあはあ息を弾ませている還俗した僧侶に向けられた。

「うちの息子に手を出すことは許さないからね！」サンタンはヒステリックに大きな叫び声を上げたが、人々は懐中電灯に照らされた剥き出しの胸を見つめて、どつと大笑いした。グラはまだ動悸が収まらず、母親の胸にしつかりすがりついていた。しかし、親子はそれでも人々によって無理やり引き離された。

四

その夜は大きな満月が空高くかかり、ぼんやりとした山影が遠くに佇んでいた。その夜、ふだん静かなジル村は狂

乱状態だった。全村の老若男女がみな眠りから覚めて、広場を埋めた。一群の成年男性が、驚き狼狽している小さな子どものグラを、乱暴に押ししたり小突いたりしながら、村の外へと歩かせた。懐中電灯が吐き出す光の柱が左右に揺られて暗い夜を突き破り、明るい月の光の下で松明を燃やしている者までいた。グラは転びそうになりながら歩き続けたが、足取りが少し遅くなると、乱暴な手で背中をどんと押された。何度も転んだが、すぐに誰かに襟口を掴まれて地面から引き起こされた。「くそガキめ、とつと歩け」

多くの声が背後からがやがや聞こえたが、それはみなグラへの嘲罵だった。ちび屑野郎、ちび蛇、悪ガキ、小悪魔などが人々の口から吐き出されて、グラの頭上で炸裂した。グラの目の前にはジル村の人々の顔が次々に現れた。まづ自分より年かさの男の子、コルチ家のアカ、ワンチェ兄弟、大声のルオトンチュの息子、兎口のチメだった。もちろんそれに加えて村の様々な指導的な仕事をしている彼らの父兄の声もあった。多くの粗暴な声と、多くの荒々しく乱暴な手が、グラを村の外野原へと押していった。突然グラは何日か前に人民公社映画隊がやって来て上映した映画を思い出した。長い髭を生やした悪人が、怒った人々によってこうやって村の外へと連行され、肉体的に消滅させられたのだ。グラは振り返ると、一番怒りに駆られているウサギの父親の足にしがみついた。「母ちゃんは何サンタン、早く助けてくれよ！」

だが母親の声は聞こえなかった。

人々の間で冷酷な哄笑が弾けた。エンポは素早くこの子を持ち上げた。「誰もおまえを殺しはしない。このガキめ、言え。昼間うちのウサギをどこへ連れて行った」

グラはこの時ようやく知ることになった。いまウサギは自分用の小さな寢床に横たわり、ひきつけを起こしながらうわごとを言い続けている。何でも花の妖精がこの世は苦しみあまりに多いので、天上へ連れて行ってくれるとか。ウサギは更に、自分はずっと天上からやって来たのであり、いまは美しい天上へ帰ろうと考えているとも言った。大人たちはちよつと考えて、きつと例の父無し子の悪ガキ、グラがウサギを野外へ連れ出したため、花の妖精に憑りつかれ

たのだと思った。

そこで、村人全員がひとつの小さな命のために激情に駆られたのだ。迷信を打破しようという時代にあつて、取り除かれたすべての迷信が、月の皓皓と照る夜にあつという間に復活した。あらゆる山川の妖魔や鬼神伝説が、この時いともたやすく復活した。熱心な先進的活動家や民兵や共産主義青年団員や生産隊幹部まで、この時は田舎の伝統的雰囲気は飲まれ、一人の可哀そうな子どもに同情して狂乱状態になった。エンポは懐中電灯を振り動かしながら、その強い光を向こうの方へ向けて訊いた。「おまえたちはこの花に触つたか。言え、大きな声で。クソ野郎、おれには聞こえんぞ！」

懐中電灯の光がひと群れのヒヤシンスを上から照らすと、グラは泣きながら「うん」と言った。

赤や白に咲く一重のヒヤシンスは、人々の足で泥の中へと踏みつぶされてしまった。

懐中電灯の光が野百合を上から照らすと、グラは泣きながら「うん」と言った。

天に向かつてラッパのように美しく咲く野百合は、大勢の足によつて踏みつぶされて、ぐしゃぐしゃになった。

他にタンポポ、ツツジ、或いは花弁が絹のように美しい青いケシもあつた。夏の原野で風を受けてたなびく美しいものはことごとく、人を虜にする花の妖精が住むという理由から踏みつぶされた。グラは泣いて、エンポの両足に再び抱きついた。「おじさん、花の妖精に言ってくれよ。ウサギを連れて行かないで、僕を連れて行くようにと」

エンポは多少忍びない様子だったが、人々ががやがや騒いでいるので、力いっぱい足を上げると、「どけ！」と叫んでまとわりつく子どもを振り払つた。踏みつぶされた花の魂を、護符を使つて鎮める作業が続いた。やがて人々は理由も分からぬまま集まつたかのように、どつと声を上げて散つていった。後日、グラが当時の情景をどう思い返してみても、人々は妖怪の如くどつと声を上げて散つていったとしか思えなかつた。独り残されたグラは驚き狼狽したまま、全身に痛みを覚え、踏みにじられた村外の草地に横たわつていた。松明の燃えさしが次第に消え、空中に漂つていた火や煙の匂いが尽きた。地面に横たわつたグラの周囲は静まり返り、この時グラはこの世界に花の妖精が本

当にいたのだと本気で信じたかった。同時に、このような美しい神秘がこの世界に存在するはずが全くないことも分かっていった。一人でも住みたくない世界に、神仙が住むはずがない。妖精たちが無窮の忍耐力を持っていたとしても、きっと住みたくはないだろう。

天上では天の川が流転し、濃紺の夜空は深遠だった。世界のどこでも同じように美しい空を頂いているのに、なぜある場所では人々は楽しく安らかに平和に暮らし、ある場所では人々は互いに噛みつき引き裂く犬の群れ同然となるのだろうか。

〈続く〉

コレクション中国同時代小説Ⅰ 空山

阿来 著／山口守 訳

定価三、七八〇円（本体三、六〇〇円）

ISBN978-4-585-29511-2 C0397

四六判・上製・四二四頁

二〇一二年四月刊行予定

勉誠出版 株式会社 刊